詩と証言
——クレアの環境詩のアガンベン的解釈の試み

金　津　和　美

1. はじめに——農民詩人Clareと環境主義

環境主義詩人としてのJohn Clare (1793-1864) の再評価は、Jonathan Bateの *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition* (1991) 及び*The Song of the Earth* (2000) によって決定的なものとなった。Bateは例えばClareの初期作品 “The Lamentations of Round-Oak Waters” をあげて、囲い込みによって失われたものへの悲しみを人間の視点から訴えるのではなく、土地そのものの声として救い出しているところに環境主義的な意義を見出している(Bate, *The Song of the Earth* 165)。Bateの議論を継承してKate Rigby もまた*Topographies of the Sacred* (2004) において、“The Lamentations of Round-Oak Waters” をClareの詩的主題が最初に表明された作品と位置づけ、人間中心主義から脱して土地や自然そのものの声を回復しようとするClareの詩学に、21世紀に先駆けた環境主義的実践を指摘している (59)。

環境批評におけるClareの再評価は、歴史的局所性を超えてその詩作品の普遍性を発見することでもある。高度資本主義によってますますグローバルに肥大化し無機質になっていく21世紀の場所の感覚において、失われつつある、あるいはすでに失われた土地の声を再生し、土地との結びつきを回復することを可能にするという点において、Rigbyは “Clare’s untimeliness”(60)を強調する。またBateは “The Lamentations of Round-Oak Waters” の読者にオーストラリアの先住民アボリジニを想定し、始原的な時間性へと遡ることで、

環境詩としての普遍性を読み取っている(Bate, *The Song of the Earth* 166)。白人文化がもたらされる以前からオーストラリア先住民の間に伝わる原初的な場所の感覚、精霊の声に導かれて移動する道なき道、“Dreaming-track”や“Songline”(Bate, *The Song of the Earth* 165)と呼ばれる伝統と結びつけることで、Clareの詩に小川そのものの声、アボリジニの伝統に繋がる始原的な自然の声が存在していると論じている。

環境詩としてClareの詩を読解することは、このようにテクストの脱歴史化がともなうことのようである。しかし、その一方でSimon Kövesiは*John Clare: Nature, Criticism and History* (2017) において、現代の環境批評におけるClare解釈が、その脱歴史化の傾向ゆえに不十分であると指摘する。例えばRigbyが詳述する場所の感覚の神聖化の系譜をあげて、農民詩人というClareの存在と不可分である階級の問題が軽視され、環境詩人として異次元の空間と歴史的文脈に移し変えられてしまったことで、Rigbyのポストモダニズム的解釈はClareの場所の感覚を不必要に歪め、単純化してしまっているとKövesiは言う[1]。Bateによって環境主義詩人としてのクレアの評価が確立して以来、環境批評の研究動向の進展は著しい[2]。Kövesiが問題提起するように、地理的および歴史的局所性と普遍性、その双方の文脈においてClareの詩的テクストを捉えなおし、Clareを環境主義詩人とする現代的意義はどこにあるのを、もう一度、問い直してみる必要はないだろうか。言い換えるならばそれは、Clareの詩においてBateやRigbyが指摘するような土地や小川といった事物そのものの声を見いだすことではなく、むしろ言葉を持たないものが、失われ、奪われたものをいかにして証言し、訴えることができるのかと問い直すことでもある。

「言語をもたないものの証言不可能性」(50)について問い直し、証言行為の意味を再考したのはGiorgio Agamben(1942-)である。『アウシュヴィッツの残りのもの——アルシーヴと証人』においてAgambenは、アウシュヴィッツ収容所からの生還者Primo Michele Levi (1919-1987)の証言を例にあげながら、

ナチスのみならずユダヤ人たちからさえも人間性を否定され、虐げられた存在、「回教徒」(der Muselmann)と呼ばれる非-人間的存在こそが人間性の「完全な証人」(108)であるというパラドックスを解読する。Agambenの試みは、アウシュビッツという極限状態について何を証言するのかではなく、証言するということはいかなることかという存在論的な問いへと目を向けることにある（岡田66）。

本論では、証言という言語行為をめぐるAgambenの問いかけを念頭において、Clareの“Badger”[3]に注目して考察する。村人の獲物となる穴熊の姿を描いたこの詩において、悪や暴力の存在を語ることの困難を読み取ることは、現代の環境問題にも通じる文明的危機について地理的・歴史的局所性の深みから行われた証言行為としてClareの詩を検証し、Kövesiの問題提起への応答を試みることでもある。自然について語ることの可能性と不可能性という問題を提起するテクストとして、Clareの詩を一つの証言行為として読み解くことを通して、農民詩人として、また環境主義詩人としてClareの詩学の現代的意義を再考してみたい。

2. 詩人の「本当の声」を探す

Clare研究の難しさは、定本となる作品テクストが確立されていないところにある。1960年代以降、Clareの生前に出版された作品および草稿として残された詩作品はPaul Dawson、David Powell、Erick Robinsonを中心とする研究者によって編集され Oxford University Pressから出版された。しかし、その後もClareの作品テクストにおける詩人の「本当の声 (authentic / original voice)」をめぐる議論が絶えない。

Oxford版の編集方針は草稿に残されたClareの言葉をそのまま再現することにある。処女詩集 *Poems Descriptive of Rural Life and Scenery* (1820)を始めとして、Clareの詩作品は主にはロンドンの編集者John TaylorとJames Augustus

Hesseyによって夥しい修正が加えられて出版された。農村労働者の息子として十分な教育を受ける機会がなかったClareは、文法を修得することが不得手であり、そのために草稿に残された詩文には、読点、句読点が施されることなく、非標準的な綴りや農村社会でのみ用いられる特殊な表現が散見される。Taylorたちはロンドンを中心とした都市文化の読者たちにこの“The Northamptonshire Peasant Poet”が受け入れられるように、その文体を知的階級の文学的趣味や規範に合うように修正する必要があると考えた。しかし、Oxford版の研究者はTaylorたちの編集行為を知的階級による農村社会の文化的抑圧とみなし、その知的支配からClareの本当の声を解放し、回復するべきであると主張する。彼らは農村文化に根ざしたClareの詩の独自性は草稿の中に存在すると考え、都市出版文化の土壌に移し替えることは、その独自性を奪い、押し殺すことであり、このように編集されたClare のテクストを読むことは読みやすさよりも意味の曲解の方により多く気付かされるという[4]。

一方、Jonathan Bateは伝記*John Clare: A Biography* (2003)に続いて出版した詩選集 *“I Am”: The Selected Poetry of John Clare* (2003)と*John Clare: Selected Poems* (2004)において、Oxford版とは異なる編集姿勢を示している。Bateによれば、Clareは行きすぎた修正は求めていなかったが、句読を施し、標準的な綴りに改めるなど、Taylorたちが必要と思う編集が行われることをむしろ望んでいたとする (Bate, *Selected Poems* xxx-xxxi)。だとすれば、詩人としてのClareの本当の声は、必ずしも草稿の中にのみ存在するのではない。むしろClareの詩的精神を深く理解する友人や編集者との関わりの中に見出されるものであり、したがってBateは、現代の研究者による批評的判断と伝記的分析に基づく学術的な視点から、詩人の精神に反するような修正を避け、“improvements of which he approved or is likely to have approved” (Bate, *Selected Poems* xxxii)を見極めることが必要であると述べる。

Oxford版とBateの詩選集に見られる編集姿勢の違いをKövesiは “Editing

Wars" (127)と呼んで、1980年代から1990年代に盛んに行われた標準語に関わる政治的立場の相違をその背景に読み取っている。しかし、草稿を素材としてのみとらえ、固定された編集方針にしたがってテクストを起こしているという点において、Oxford版の編者とBateは、いずれもテクスト原始主義(textual primitivism)に陥っていると指摘する (135)。Sara Guyer も同じく*Reading with John Clare: Biopoetics, Sovereignty, Romanticism* (2015)において、Oxford版とBateの詩選集は編集方法において異なるだけで、その目的とするところは等しいと述べ、そこに美学的および倫理的判断の混同という問題があることに注意を促している(43)。

本論においてGuyerの議論が興味深いのは、それがロマン主義以降、詩と哲学の分離が起こったとするGiorgio Agambenのロマン主義的イデオロギーへの批判にClareの文学を通して応えようとしているからだ (5, 41)。GuyerがClareに注目するのは、Agambenが批判の目を向ける近代の生政治(biopolitique)という問題、経済的・衛生的合理性のもとに生を管理する主権的権力、いわば「生かしながら死ぬがままにしておく」という「生権力（bio-power）」(『アウシュビッツの残りのもの』109) の具体例を、囲い込みによって故郷を失い、精神療養所の中で20年間にわたって生き永らえたClareの生涯の中に見出すからである(4)。

Oxford版の編者Eric RobinsonとBateはいずれもClareの本当の声を聴き、回復しようと試みる点において等しい。しかし、そこでGuyerは、RobinsonやBateが考えるClareの声は、本当に失われたものなのか、あるいはもともと存在しなかったのではないかと問う (48)。不在が喪失と混同されるとき、失われたと思われるものへの場違いな郷愁やユートピアを志向する政治性がそこに介在してくるというDominick LaCapraの言葉を引用して (49)、GuyerはRobinsonやBateの批評実践において、いかに倫理的判断が美学によってすり替えられ、それとともに生権力が無自覚に媒介されるかを読み取っている。

RobinsonやBateとは異なり、Guyerは "to speak of Clare's authentic voice as

absent may not be the same as saying there is no poetry" (48)と述べて、むしろ本当の声が存在しないところにClareの詩の本質を発見する。そして、本当の声の不在を表明する詩作品の一つとして、"I am—yet what I am, none cares or knows" [6]と存在意識の破綻を告白する詩 "I Am"をあげ、この詩を "a poem of nonpersonification" (55)と定義づけて、特にこの詩の最終行 "The grass below—above the vaulted sky"(18)に注目している。空を円筒型天井（vault）として見るクレアの視線の崇高性は、天空を自然の霊性が宿る場として見るWilliam Wordsworthの崇高とは異なり、むしろ空を形式としてのみとらえるImmanuel Kantの純粋直観に基づく崇高に近い。その風景は "a 'flat' and formal scene in which there can be no mind, no consciousness, just pure 'unmediated' vision" (54)であり、そこには人間的な意識や身振りの存在が感じられない。"a poem of nonpersonification"と定義される詩 "I Am"の悲痛は、喪失した自我意識が回復されると信じた場所においてさえも、人間の不在を発見するという悲劇にある。Guyerにしたがえば、Clareの詩の本質は自分を語る声の不在、自分を知り、語ることの不可能性の表明にあるといえる。

3. 詩的体験としての恥ずかしさ

「人間が生起する(ha luogo〔場所を持つ〕)のは生物学的な生を生きている存在と言葉を話す存在、非-人間と人間のあいだの断絶においてである」(183)と述べて、Agambenは言葉を話すという行為にともなって起こる脱主体化について論じ、1818年10月27日付でJohn KeatsがRichard Woodhouseに送った手紙に注目している。"A Poet is the most unpoetical of any thing in existence: because he has no Identity" (387) と詩人としての存在の無を述懐するKeatsの手紙は、詩的体験において不可避に生じる自己存在への違和感や恥ずかしさを告白しているとAgambenは言う(151-52)。つまり、詩作とは非-人間と人間との断絶を突きつけられる体験であって、その断絶によって開かれた空虚な場

に詩人は自己存在を意識し、応答を試みる。詩人が表明する恥ずかしさは、自らの存在の無に対してなすすべも無いことに戸惑いながら、その空虚に応えて示す最初の身振りなのである。

詩人としての存在の無を告白するKeatsの手紙に匹敵して、恥ずかしさに満ちたClareの文書がある。第3詩集*Shepherd's Calendar*の出版の後、Clareは詩集*The Midsummer Cushion*を独自に出版する可能性を模索して、1832年9月に*Stamford Bee*や*Drakard's Stamford News*といった地方紙に予約購読趣意書を掲載している。

> The proposals for publishing these Fugitives, being addressed to Friends, no further apology is necessary than the plain statement of facts.
>
> Nessesity is said to be the mother of invention, but there is very little need of invention for truth; and the truth is, that difficulty has grown up like a tree of the forrest, & being no longer able to consceal it; I meet it in the best way possible, by attempting to publish them for the benefit & that of a numorious & increasing family—
>
> It were false delicacy, to make an idle parade of independence in my situation; and it would be unmanly to make a troublesome appeal to favours public or private, like a public petitioner; (*MP* III, 3)

Clareはこの詩集を出版する目的を、大所帯となった家族を支え、生活の苦しさを和らげるという“Nessesity”によるものだと直裁に告白している。興味深いのは、この趣意書に一貫して表現されている自己卑下と深い罪悪感である。今更に農民詩人としての “independence” を主張するのもわざとらしくて憚られ、また “a public petitioner” のごとく読者の慈悲を乞う我が身がみっともなく、情けないと述べて、この趣意書は、詩人として身の置き場のない恥ずかしさ、情けなさに満ち満ちている。それは自身の貧しさゆえの劣等感の表れとも、予約購読者に対する社交辞令として装われた謙虚さとも異なる。ましてそこには囲い込みによって土地を奪われ、搾取された犠牲者としての

怒りや抵抗は読み取れない。

注目したいのはClareが自身の詩作品を“these Fugitives”という語を用いて呼んでいる点である。“One who flees or tries to escape from danger, an enemy, justice, or an owner”(“Fugitive”)という意味を持つこの語によって、自らの故郷の自然を描いた詩を呼ぶのであれば、それは何から逃れ、身を隠しているものなのか。そして、そのように危険を避けて守られるべき故郷の自然を捕らえ、自らの「必要」のために衆目に晒そうとするのであれば、詩人は自然への侵犯者として罪を負う存在ということにならないだろうか。この “these Fugitives” という言葉には、隠れているもの、隠されておくべきものを捕らえ、暴く存在として、詩人のためらいと気後れが読みとれる。

*The Midsummer Cushion*はClareの手によって出版されることはなく、1835年に支援者の一人Eliza Emmerson夫人によって*The Rural Muse*と改題されて出版された。Emmerson夫人が手を加えたであろうと思われる序文には、謙虚で控えめな農民詩人の声によって、読者の厚意に寄せる篤い信頼とともに、この詩集が求めるのは “praise”(*MP* III, 8)ではなく “encouragement”(*MP* III, 7)であることが語られる。しかし、Clareが自ら*The Midsummer Cushion*のために用意した序文には、趣意書の罪悪感に満ちた語調を引き継ぎながら、“additional need of apology”(*MP* III, 6)に応えるために*The Midsummer Cushion*というタイトルの由来について説明している。

> It is a very old custom among villagers in summer time to stick a piece of greensward full of field flowers & place it as an ornament in their cottage which ornaments are called Midsummer Cushions And as these trifles are field flowers of humble pretentions & of various hues I thought the above cottage custom gave me an oppertunity to select a title that was not inapplicable to the contents of the Volume—not that I wish the reader to imagine that by so doing I consider these Poems in the light of flowers that can even ornament a cottage by their presence—yet if the eye of beauty can

> feel even an hours entertainment in their perusal I shall take it as the proudest of praise & if the lover of simple images & rural scenery finds any thing to commend my end & aim is gratified (*MP* III, 6-7)

Helpstonの農村では、小さな芝土に野の花々を刺して花飾りを作り、家々に飾り付けるという夏の風習があり、この村の風習をClareは自身の詩の喩えとして詩集のタイトルに用いた[5]。花飾りと同じく、Clareの詩は故郷の野に咲く花を摘み取り、人の手で異なる土壌へと移し替え、整えたものである。たとえそれが村の風習であったとしても、花飾りはもはや野に咲く花そのものではない。しかもClareは、村の風習として家々を飾る花飾りと同じものとして、自身の詩が考えられることを否定している。むしろ彼の詩は“an hours entertainment”として、野に咲く花よりも、また村の花飾りよりも無意味で儚い楽しみにすぎないと、その空虚さを悔い、恥じ入っている。*The Midsummer Cushion*の趣意書や序文に見られる異質さは、その詩が自然そのものではないことを詩人が重ねて詫び、自然そのものを描くことの不可能性を告白しているところにある。そして、そこに漂う痛ましいまでの罪悪感は、自らの詩作という行為によってもたらされる変化への違和感、またそれゆえに自身の存在に覚える恥ずかしさとして解釈することができないだろうか。

Clareが自身の詩作について、このような罪悪感、恥ずかしさに苛まれていたとするならば、RigbyやBateが言うように、Clareの詩の中に土地や小川という自然そのものの声を聞き取ることはいかにして可能なのか。むしろ問われるべきは、語ることのできないことを語ろうとする不可能性、そして、それをあえて語ることによって伴ってくる罪の意識、その自虐的な試みの中で尚も語るべき言葉を追い求めるClareの声とはいかなるものなのか、という問いであろう。言い換えれば、Guyerが指摘するようにClareの本当の声の不在、存在の無は、人間の何をどのように証言しているのか、次に“Badger”を取り上げて考察してみたい。

4. “Badger”——悪と暴力の証言

BBCラジオ番組のために書き下ろされた詩論*Poetry in the Making* (1967)の第1章 “Capturing Animals”においてTed Hughes (1930-1998)は、Clareの詩“Badger”を引用している。10歳から14歳の子供たちを対象として詩の書き方を紐解いたこの詩論集でHughesは、狐を生け捕りにしようとなんども試みて、殺してしまったという子供時代の痛ましい思い出を語りながら、頭に浮かんだ狐の姿を言葉にした詩の中に “a real fox” (20)を見出した時の驚きと、生き物の命をそのままに捕らえることのできる詩の力への感動を綴っている。そして、詩人と動物が一体となることで生まれてくる言葉によって、生命が捕えられて形が与えられるという詩的創造の一例として、HughesはClareの“Badger”を、次のような3連詩として掲載している[7]。

When midnight comes a host of dogs and men
Go out and track the badger to his den,
And put a sack within his hole, and lie
Till the old grunting badger passes by.
He comes and hears –they let the strongest loose.
The old fox hears the noise and drops the goose.
The poacher shoots and hurries from the cry,
And the old hare half wounded busses by.
They get a forked stick to bear him down
And clap the dogs and take him to the town,
And bait him all the day with many dogs,
And laugh and shout and fright the scampering hogs.
He runs along and bites at all he meets:
They shout and hollo down the noisy streets.

He turns about to face the loud uproar
And drives the rebels to their very door.
The frequent stone is hurled where'er they go;
When badgers fight, then everyone's a foe.
The dogs are clapt and urged to join the fray;
The badger turns and drives them all away.
Though scarcely half as big, demure and small,
He fights with dogs for hours and beats them all.
The heavy mastiff, savage in the fray,
Lies down and licks his feet and turns away.
The bulldog knows his match and waxes cold,
The badger grins and never leaves his hold.
He drives the crowd and follows at their heels
And bites them through—the drunkard swears and reels.

The frighted women take the boys away,
The blackguard laughs and hurries on the fray.
He tries to reach the woods, and an awkward race,
But sticks and cudgels quickly stop the chase.
He turns again and drives the noisy crowd
And beats the many dogs in noises loud.
He drives away and beats them every one,
And then they loose them all and set them on.
He falls as dead and kicked by boys and men,
Then starts and grins and drives the crowd again;
Till kicked and torn and beaten out he lies
And leaves his hold, and cackles, groans, and dies. (Hughes 24-25: ll. 1-42)

興味深いのはHughesの3連詩を始めとしてクレアの “Badger”には、編者の解釈によって異なる複数のテクストが存在することである。例えばRobinsonとともにOxford版の編集にも関わったGeoffrey Summerfieldはペーパーバック版の詩選集*John Clare: Selected Poems* (初版1990)において、Hughesの3連詩の前に次の2連の詩を挿入している。

The badger grunting on his woodland track
With shaggy hide and sharp nose scrowed with black
Roots in the bushes and the woods and makes
A great hugh burrow in the ferns and brakes
With nose on ground he runs a awkard pace
And anything will beat him in the race
The shepherd’s dog will run him to his den
Followed and hooted by the dogs and men
The woodman when the hunting comes about
Go round at night to stop the foxes out
And hurrying through the bushes ferns and brakes
Nor sees the many holes the badger makes
And often through the bushes to the chin
Breaks the old holes and tumbles headlong in

Some keep a baited badger tame as hog
And tame him till he follows like the dog
They urge him on like dogs and show fair play
He beats and scarcely wounded goes away
Lapt up as if asleep he scorns to fly
And seizes any dog that ventures nigh
Clapt like a dog he never bites the men

But worrys dogs and hurrys to his den

They let him out and turn a barrow down

And there he fights the pack of all the town

He licks the patting hand and trys to play

And never trys to bite or run away

And runs away from noise in hollow trees

Burnt by the boys to get a swarm of bees (Summerfield 121: ll. 1-28)

注目されるのは、上記引用の2連目 “Some keep a baited badger…”で始まる詩連は、Peterborough Public Library所蔵の草稿Peterborough MS B9の66ページにあり、同じ草稿64-65ページに記述されたそれ以外の4連の詩とは異なるページに書かれている点だ。これらの詩文を一連の作品と考えるならば、“Some keep a baited badger…”で始まる詩連は全体の5連目に位置付けられるはずである[8]。しかし、必要な省略記号や疑問符を加えるなど最低限の修正を施す以外は、基本的にはOxford版の “a policy of non-intervention”(24)を踏襲するとしながらも、Summerfieldは “The Badger”[9]については、“Some keep a baited badger…” の詩連を全体の2連目に挿入して、その理由を “since in the terminal position it is gratingly anti-climactic” (366)と説明している。

また、Bateは詩選集*John Clare: Selected Poems* において、“so in this edition—for the first time—Clare’s badger (often anthologized selectively) is printed as a ‘Sonnet sequence on Fox and Badger’”(Bate, *Selected Poems* xxvii)と述べて、Peterborough MS B9 64-65ページに先立つ63ページに記された狐狩りについてのソネット2連から続く、6連からなるソネット連作として編集している。Bateが挿入した冒頭の2連では、狐狩りに加わった羊飼いや農夫、木こりたちが、偶然に穴熊の巣を見つける場面が描かれ、2連目の最後の4行で獲物が狐から穴熊へと入れかわる。

The shepherd broke his hook and lost the skin—

He found a badger hole and bolted in.

They tried to dig but safe from danger's way

He lived to chase the hounds another day.

(Bate, *Selected Poems* 226: ll.25-28)

続く詩連で穴熊狩りに加わる村人の様子が描かれ、追い詰められた穴熊が激しい抵抗の末に倒れ、息絶えるところでBate編集によるソネット連作は結ばれる。しかし、Summerfieldの5連詩とは異なり、Bateのソネット連作では "Some keep a baited badger…"で始まる詩連は削除されている。というのも、穴熊の死を描いた最終連のみが14行ではなく、12行で構成されているため、"This foreshortening is dramatic and purposeful" (Bate, *Selected Poems* xxvii)と述べて、Bateは狩られる対象が狐から穴熊へと移り変わる語りの結末("the end of a narrative line": Bate, *Selected Poems* xxxvii)がこのソネットの欠落した最後の2行(couplet)にあると判断している。

このように"Badger" については、Ted Hughesの3連詩、Summerfieldの5連詩、Bateの6連からなるソネット連作など異なるテクストが存在する。しかし、いずれのテクストも等しく重要視しているのは詩的統一体としての語りの一貫性であり、村人たちが穴熊を見つけ、追い詰め、殺すまでの過程が時系列に沿って語られることである。そしてHughesが強調する詩人と穴熊の一体感は、ロンドンの出版界のみならず、故郷Helpstonを去って移り住んだNorthboroughの農村社会でも疎外感を深めるClareの苦悩や悲しみ、そして怒りが、村人の暴力の犠牲となる穴熊に投影されたものとして解釈される傾向があるようだ[10]。Summerfieldが、草稿では最終連にある "Some keep a baited badger…"の14行詩を2連目に移動させて、穴熊の死を強調することで "anti-climactic"に陥ることを避けるべきと判断したのも、そのためであったと考えられる。

しかし、David Perkinsは、Clareの "Badger"における詩人と穴熊との一体化を認めながらも、"the absence of explicit condemnation" ("Sweet Helpston" 395)に注目し、語り手の立場の曖昧さを指摘している。Perkinsによれば、19世紀

初頭にいたるまで闘鶏や闘犬と並んで穴熊狩り(“badger baiting”)はイングランドの農村大衆文化の中で広く親しまれてきたスポーツであり、また祝祭的な習慣であった(“Sweet Helpston” 387)。初期近代のイングランドでは、大食や色欲といった罪の贖いや戒めとして穴熊のような小動物を生贄とすることが、農村共同体の精神性を象徴する儀式として長く受け継がれてきた。しかし、18世紀末以降、感受性を重んじる近代都市文化の普及によって動物愛護の精神が唱えられ、穴熊狩りを始めとする農村の祝祭文化は野蛮で非人道的であるとして遠ざけられるようになる(“Sweet Helpston” 388-389)。1802年に提出された“baiting”を禁止する法案は未だ「過激 (Jacobinical)」であるとして議会を通過することはなく (“Sweet Helpston” 394)、Clareが “Badger”を書いたと思われる1835年頃でも、“baiting”が法的に禁止されるということはなかった。しかし、教育、家柄、財産に恵まれた知的階級によって動物狩りの廃止は広く支持され、農村社会の日常的な風景としては次第に失われていく(“Sweet Helpston” 394)。

農村共同体に生きる者として、Clareも穴熊を狩り、祝祭に加わる村人の視点にも立っている。だとすると農民詩人Clareを、ただ単に村人の暴力の犠牲となる穴熊とのみ同一視することができるだろうか。“Badger”の複雑さは、その語りが一つの詩作品として時空間の一貫性を目指すのと同時に、動物狩りが行われる農村文化の周期的な時間性の中にあるからである。動物狩りの様子を断片化して描いた詩連としてClareの草稿を見れば、農村社会で日常的に繰り返し行われ、楽しまれる祝祭としての時間の周期性をそこに見いだすことができよう。狐狩りの途中で見つけられた穴熊の巣には、“He lived to chase the hounds another day”と罠がかけられ、狐狩りは穴熊を獲物とする次の祝祭へと繋がっていく。 “Some keep a baited badger…”で始まる草稿最後の詩連では、一匹の穴熊の壮絶な死の後に、村人に手懐けられる別の穴熊が現れて、祝祭は繰り返されていく。描かれる穴熊はそれぞれ異なっているかもしれないが、穴熊狩りの風習は古来から守り受け継がれてきた村の生

活の一部なのであり、そこには文化的時空間の断絶性と継続性が同時に存在している。そのように考えれば、Bate編集のソネット連作の最後の12行において、欠落して書かれなかった最後の2行（couplet）は、Bateが指摘するように “the end of a narrative line”として穴熊の死という結末を語るものであるとともに、農村文化の継続性を示す時間的な余白であったとも言えるだろう。

草稿の詩連の間に残された余白の中に、農村社会から疎外された者であるのみならず、農村の祝祭文化を守り慈しむ者として、農民詩人Clareの複雑な立ち位置が読み取れる。そして、その複雑さにこそ、Clareの本当の声が不在である理由が見い出せないだろうか。Perkinsと同じくSarah Houghton-Walkerは “Badger”における語りの曖昧さに論及し、“Clare once more falls between the gridlines of a convenient map of ‘evil,’ defying attempts to categorize or to define what that ‘evil’ might be, but highlighting the sense of its presence in his world” (188)と述べて、この詩を社会あるいは人間の中に存在する悪の意味を問うのではなく、悪の存在の不可避性をのみ描いた詩であると定義している。Houghton-Walkerによれば、農村文化の風習として穴熊を狩るという行為そのものには悪は存在しない。感受性が道徳的主体の規範となり、動物愛護を訴えるような近代的価値観が普及したことで、今まで罪のないものとして楽しまれてきた祝祭は暴力として否定され、悪として排除される (185)。Clareにとって、悪は最初から存在するものではなく、近代知によって人間の意識の中にもたらされるものなのだ。

だとすれば、Houghton-Walkerが指摘するように、“Badger”は詩という近代知、あるいは言語がもつ権威への信頼の喪失(“a loss of faith in the authority of language”: 187)を物語る作品であると考えることもできるだろう。“Badger”の捉え難さは、それが近代知の言語では語り得ない悪や暴力が存在することを主張しているところにある。言い換えれば、農民詩人とは、近代知の外側とともに内側にもあって、悪の犠牲者であるとともに自らその暴力の主体として、語ることの不可能性に直面する存在だということであろう。“Badger”

において詩人は、語ることの不可能性に向き合い、その間で宙づりになって開かれた言語の余白、いわば声の不在を通して、むしろ逆説的に言語によっては語り得ない悪や暴力について、その存在を証言することを試みている。

5. まとめ——余白の詩学

入手できる限られた紙面に余すところなく縦横無尽に書きつけられた草稿に見られる “erratic orthography” (138)に注目して、KövesiはClareの詩が農村の口承文化に由来するものであると位置付ける(139)。農村共同体の中で歌として歌われ、語られた言葉によって紡がれた詩想は、四角く切り取られた紙面の中に規則性と統一性を持って言葉を配置しようとする出版文化とは本質的に相容れない (137)。それゆえにKövesiはOxford版やBateの詩選集を含むいかなる “polishing editor”(139)のテクストも同様に不十分であるとして、Clareの詩的テクストの編集不可能性を指摘する(139)。そして、それと同時に、Clareの詩を書物という形態に見られる二次元的な読書空間から解放し、草稿と出版された様々なテクストとの包括的な相互関連性を浮き上がらせる新たな編集方法、いわば “A green hypertexual edition of Clare” (154)という批評的実践が必要であると主張している。

Agambenもまた『知の考古学』においてMichael Foucaultよって用いられた「アルシーヴ (archive)」(194)という語を引用し、「あらゆる具体的な発語を取り巻いてそれを限界づける暗い余白」（194）と呼んで注目した。発語行為の断片として開かれたこの「暗い余白」に足場を据えて、Foucaultは知の考古学をうちたてたが、AgambenはFoucaultの作業を継承しつつ、それを言説の観点から言語の観点へとずらすことによって、「語ることの可能性と不可能性のあいだの諸関係のシステム」(195)として証言を読み解き、知と権力との関わりにおいて立ち上げられる近代的主体という問題を論究する。一方、環境批評において自然を取り巻く周縁（アンビエント）的な空間、自然を語る言葉の余白

に注目し、“Ecology without Nature”と呼ばれるDark Ecologyへの思考転換を促したのはTimothy Mortonである。MortonのDark Ecologyは人間の意識が環境に及ぼす影響を直視し、その罪悪感から安易に目を背けるべきではないと警告する。MortonもまたClareの詩 “I Am”における最終行 “The grass below—above the vaulted sky”に注目して、“Clare wants us to stay in the mud, rather than pull ourselves out of it” (199)と述べて、伝統的で有機的なClare解釈とは異なり、草や空という物質を超えていかなる抽象性へと向かうことなく、罪深く無意味な人間性の根源 (“the poisoned mud”:201)にとどまろうとする点に環境主義的意義を見出している。人間存在の破綻を描いたClareの詩は、その“lack of content” (199)ゆえに、人間が存在するためには悪と無縁ではいられないというおぞましい現実を開いて見せる。言い換えれば、語ることの不可能性を語ることによってClareの詩は、人間存在とは不可分なものとして悪という問題へと私たちの目を向けさせ、不可避に生じる暴力性に立ち合わせる。Clareの詩が現代において読まれうる意義があるとするならば、それは近代以降、語ることの不可能性の淵に沈んで忘れられていた人間性を連れ戻し、その不可知性にこそ人間存在の本質があることを示してみせるからであろう。

注

1. Kövesi 13-14: Kövesi はRigbyが階級問題を軽視したことで、*The Idea of Landscape and the Sense of Place 1730-1840*においてJohn Barrellが、農村社会に囲い込みが与えた影響についての現代まで続く神話的理解に施した修正を見逃し、誤読していると指摘している。そして、たとえ不可避の選択であったとはいえ、囲い込みによるHelpstonの風景の破壊はClare自身の手によって行われたという事実に注目して (Barrell 189-215)、囲い込みに対するClareの態度は極めて複雑で矛盾に満ちたものであり、Clareの中に純粋に “the ecological fantasy of a sin-free messiah”(17)を求めることは不可能であると論じている。
2. 1990年代から環境文学の理論化として興隆してきた環境批評（ecocriticism）は、

原生自然の保全に重点をおいた「第一の波」に始まり、環境の概念を自然から社会へと拡張して環境正義の批評へと発展する「第二の波」へと続く。さらに「第三の波」として「場所」の感覚に注目して、エコ・コスモポリタニズムの方向に向かい、現在では脱人間中心主義や自然の物質性を重視する「第四の波」に至っているとされる。(吉川 8)

3. 人間と動物（あるいは人権と動物権）との境界を論じることは、環境批評において重要なテーマの一つであり、この観点からClareの “Badger”を動物詩と位置づけて読む解くことも可能である。しかし、本論では、環境批評に関わる言語あるいは近代知の問題を検証するテクストとして “Badger”に注目し、環境詩の一つとして位置づけた。
4. Clare, *Poems of the Middle Period 1822-1837*, xiii. 以下、*MP*と表記する。また、Oxford版からの引用は原文ママとする。
5. “I Am”の1行目。この詩の引用は　Oxford版*The Later Poems of John Clare 1837-1864*による。
6. 現在のHelpstonでは、毎年Clareの誕生日である7月13日にJohn Clare Festivalが行われ、St Botolphs教会のClareの墓石の周りに花飾りを並べて祝うことが慣わしとなっている。
7. *Poetry in the Making*に引用された3連詩 “Badger”についてHughesは出典を明らかにはしていない。しかし、当時、最も広く読まれていたClareの詩集としてJ. W. Tibble編集による*The Poems of John Clare*である可能性が考えられる。また、本論においてこの詩のタイトルは、版によって違いがある場合を除いては、“Badger”で統一した。
8. SummerfieldはEric Robinsonと共編による作品集*Clare: Selected Poems and Prose* (1966)において、“The Badger”をタイトルとして、“Some keep a baited badger…”の詩連を最終連とする5連詩として掲載し、Oxford版にしたがった編集を行なっている。
9. 詩選集 *John Clare: Selected Poems* (1990)においてSummerfieldは、“The Badger”というタイトルを用いている。
10. Hughesと同じくJames Reevesは詩選集*Selected Poems of John Clare* (1954)においてJ. W. Tibble編の詩集から3連詩 “Badger”を編纂している。そして、その序文において、J. W. TibbleとAnn Tibble編著によるClareの伝記(*John Clare: A Life*, 1932)および書簡集(*The Letters of John Clare*, 1951)に基づいて、虐げられ迫害される詩人自身の姿が穴熊に投影されていると説明して、詩人と動物との一体感をClareの詩の本質として讃えている (Reeves, xx)。

参考文献

Barrell, John. *The Idea of Landscape and the Sense of Place 1730-1840: An Approach to the Poetry of John Clare*. Cambridge UP, 1972.

Bate, Jonathan. *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition*. Routledge, 1991.

—. *The Song of the Earth*. Harvard UP, 2000.

— editor. *"I Am": The Selected Poetry of John Clare*. Farrar, Straus and Giroux, 2003.

— editor. *John Clare: Selected Poems*. Faber and Faber, 2003.

Chare, Nicholas. "The Gap in Context: Giorgio Agamben's *Remnants of Auschwitz*." *Cultural Critique*, no.64, 2006, pp.40-68. *JSTOR*, www.jstor.com/ stable/4489257.

Clare, John. *Poems of the Middle Period 1822-1837*. Edited by Eric Robinson, David Powell and P.M.S. Dawson, vol. III and V, Clarendon Press, 1998.

—. *The Later Poems of John Clare 1837-1864*. Edited by Eric Robinson and David Powell, vol. I, Clarendon Press, 1984.

—. *The Prose of John Clare*. Edited J. W. and Anne Tibble. Routledge & Kegan Paul, 1970.

"Fugitive." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Vol. VI, Clarendon Press, 1989.

Guyer, Sara. *Reading with John Clare: Biopoetics, Sovereignty, Romanticism*. Fordham UP, 2015.

Houghton-Walker, Sarah. *John Clare's Religion*. Ashgate, 2009.

Hughes, Ted. *Poetry in the Making: A Handbook for Writing and Teaching*. Faber and Faber, 1967.

Keats, John. *The Letters of John Keats*. Edited by Hyder Edward Rollins, vol. II, Harvard UP, 1958.

Kövesi, Simon. *John Clare: Nature, Criticism and History*. Palgrave Macmillan, 2017.

Morton, Tomothy. *Ecology Without Nature: Rethinking Environmental Aesthetics*. Harvard UP, 2007.

Perkins, David. *Romanticism and Animal Rights*. Cambridge UP, 2003.

—. "Sweet Helpston! John Clare on Badger Baiting. " *Studies in Romanticism*, vol. 38, no.3, 1999, pp.387-407. *JSTOR*, www.jstor.com/ stable/25601401.

Reeves, James, editor. *Selected Poems of John Clare*. Heinemann Educational Books Ltd, 1954.

Rigby, Kate. *Topographies of the Sacred: The Poetics of Place in European Romanticism*. U of Virginia P, 2004.

Robinson, Eric and Geoffrey Summerfield editors. *Clare: Selected Poems and Prose*. Oxford

UP, 1966.
Summerfield, Geoffrey, editor. *John Clare: Selected Poems*. Penguin Books, 1990.
Tibble, J. W., editor. *The Poems of John Clare*. J. M. Dent, 1935.
Tibble, J. W. and Ann Tibble, editors. *John Clare: A Life*, Cobden-Sanderson, 1932.
—. *The Letters of John Clare*, Routledge & Kegan Paul, 1951.
アガンベン、ジョルジョ　『アウシュヴィッツの残りのもの——アルシーヴと証人』　上村忠男・廣石正和　訳　月曜社、２００１年。
—.『スタンツェ——西洋文化における言葉とイメージ』　岡田温司　訳　ちくま学芸文庫、２００８年。
—.『開かれ——人間と動物』　岡田温司　訳　平凡社ライブラリー、２011年。
—.『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』　高桑和巳　訳　以文社、２００７年。
岡田温司　『アガンベン読解』　平凡社、2011年。
吉川朗子・川津雅江　編著　『トランスアトランティック・エコロジー——ロマン主義を語り直す』　彩流社、 2019年。

Synopsis

Poetics and Testimony: An Agambenian Reading of the Ecopoems of John Clare

Kazumi Kanatsu

John Clare has been mainly discussed as an environmentalist poet since Jonathan Bate's publication of *Romantic Ecology* (1991) and *The Song of the Earth* (2000). Bate acclaims Clare's sense of place, which responds to the suffering of a place caused by enclosure and gives it a voice to express its own loss and depletion. Kate Rigby also develops the ecological reading of Clare, placing an emphasis on the "untimeliness" (60) of his poems, which deplore the same crisis we face in the twenty-first century global economy. By contrast, however, corresponding to the current movement of ecocriticism, Simon Kövesi proposes to reexamine the transcendental interpretation of Clare's poems: the ecocritics' efforts to displace him both in terms of space and in terms of history in order to read Clare ecologically (13). As a response to Kövesi's suggestion, the aim of this paper is to reread Clare's poems in their specific historical context and to inquire into the modernity of his poetics. This is also an attempt to address a provocative question raised by Giorgio Agamben, concerning the act of testimony in *The Remnants of Auschwitz* (1998), by asking how the poet's voice can be the voice of the place or the voice of the witness to its suffering. An examination of the equivocality of the poetic voice in Clare's poems, "Badger" in particular, illuminates the possibility and impossibility of poetic language to speak about violence in human nature as well as in society.

The difficulty in identifying Clare's original voice is exemplified by the controversy over the editing policy of Clare's texts. On the one hand, the scholars of the Oxford edition of Clare's works, notably Erick Robinson, propose transcribing Clare's words from the manuscripts into a printed text without any intervention. By doing so, they try to restore Clare's voices of the rural community from the cultural suppression of urban intellectual culture. On the other hand, Bate justifies some alterations, if they are not against the poet's spirit, because Clare always desired his editors to improve his writings and never expected to have his poems printed without their corrections. While suggesting the impossibility of finding Clare's authentic voice in his poems, however, Sarah Guyer argues that, despite the difference in their editing policy, Robinson and Bate are both the same in their endeavor to listen to Clare's voice as something lost and something to be restored.

The absence, not the loss, of the authentic voice in Clare's poem, "Badger," is a remarkable example of desubjectification, which Agamben elucidates as natural phenomena accompanied by poetic writing, referring to a letter of John Keats: "A Poet is the most unpoetical of anything in existence: because he has no Identity." The poem "Badger" has a variety of printed texts differently anthologized by modern editors including Ted Hughes, Bate and Geffrey Summerfield. Nevertheless, all the texts agree in maintaining the consistency of the narrative to emphasize the pain and agony of the baited badger and, more importantly, to identify the sorrows of the poet with the suffering of the hunted animal. It is intriguing to see that a cross-examination of the printed texts and Clare's manuscripts suggests another reading of the poem, highlighting Clare's deep attachment with respect to the badger baiting as a habitual ritual of his rural community. The ambiguity

of the poetic voice in “Badger” illustrates Clare’s complex attitude toward the evil that inevitably exists, but is hardly articulated, in modern society. A paradox of Clare’s poems is that the poet testifies to the violence of the evil by demonstrating the absence of his own voice, that is, the absence of language within language.